

昭和55年度OR学会賞

昭和55年度の学会賞（実施賞、普及賞、文献賞、事例研究奨励賞）はそれぞれ表彰委員会の推薦により理事会で決定し、5月15日の昭和56年度通常総会において贈呈された。各賞の選考理由は次のとおりである。

第5回OR学会実施賞

・中国電力株式会社

選考理由 中国電力では昭和35年のOR導入以来20年余の間に数多く実務上の問題に適用して大きな成果をあげ、現在では特にORを適用したとはいわなくとも、OR的思考の下にモデル化を行ない各種の手法を活用して業務の効率化をはかる姿勢が社内に定着してきている。

このことは、たとえば社内の研究発表会のテーマや内容によっても裏づけられ、最近3年間の事例研究発表を見ても24件に達している。特に需要分析、需要想定、発送変電設備計画、電力系統や配電設備計画・運用管理などの分野で効果をあげている。

ORの教育にも力を注ぎ、社外の長期研修終了者63名にはORケース・スタディ・グループを作ってさらに研修を行なった。また最近はおもっぱら社内教育を実務上のテーマによる1カ月間の実習を中心に上司とペアで受けさせ、これがORの社内定着の要因になっている。

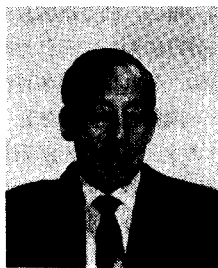
同社のORグループのメンバーを中心とするOR学会への寄与も大きく、現在までの研究発表数、電力部会の推進、中国・四国支部運営上の貢献など、いずれも群を抜いた活動であると、広く評価されている。また、県や市など、地方公共団体の要請に応じて、需要動向・環境調査などの諸活動に協力し、地域におけるORの普及にも功績がある。

このように、同社におけるOR活動と成果、特にORを日常化した実践ならびに学会・地域に対する貢献にはいちじるしいものがあるので、ここに実施賞を贈り、日頃の努力を広く顕彰する。

第6回OR学会普及賞

・河田龍夫氏

選考理由 ORがわが国に導入されたきっかけは、1952年に日本科学技術連盟に設置されたOR委員会とそれを基盤として1953年に開設されたOR教育コースである。その時以来の諸活動を称えて日科技連グループに



対して昨年度のOR学会普及賞が贈られたが、このOR委員会の中心となったのが、河田龍夫氏であった。

同氏は本学会の創立に当っては、その準備グループの要として活躍され、1957年の創立後3年間副会長として本学会の発展に尽力された。

また1957年オックスフォード、1960年エクサンプロバンスと第1、2回の国際OR会議に参加して論文を発表されるとともに、本学会のIFORS参加のための具体的な話し合いをされ、本学会が創立当初から国際協力を積極的に進める基礎を作られたといえよう。

このような、わが国ORの草創期における、活動の中心としての同氏の役割を顕彰する意味で普及賞を贈る。

経歴 明治44年2月20日生

- 昭和8年3月 東北帝国大学理学部数学科卒業
- 9年3月 同科助手
- 15年4月 仙台高等工業学校教授
- 16年6月 第一生命保険 副アクチュアリー
- 19年6月 統計数理研究所員
- 22年11月 東京工業大学教授
- 39年9月 Catholic Univ. of America 教授
- 44年8月 慶応義塾大学教授
- 54年5月 東京工業大学名誉教授

OR学会関係 昭和32年～35年 副会長 32年～52年 評議員

・小林宏治氏

選考理由 1957年に創立された日本OR学会は15年間法的には任意団体のままであった。わが国ORの推進の要となるべき当学会が法的にも一人前にならないといろいろな活動に制約を受けるので、社団法人として再発足する必要があったが、小林宏治氏は1970年頃の3年間を本学会会長として法人化のために多大の努力を払われた。特に、法人となるための基金の募金には先頭に立って活動された。



同氏をはじめとする関係者の活躍により本学会は1972年社団法人として認可されたが、この基礎のうえに立って1975年の国際OR会議およびTIMS国際会議の日本開

催が成功裡に実現した。その際の募金活動も同氏の力に負うところが大きい。日本電気会長の他、通信工業会、電子機械工業会の会長や宇宙開発推進会議委員長などの要職で多忙の間を割いて、1978～79年には再度当学会会長に就任され、当学会の発展を通してわが国ORの発展・普及に力を注がれたことは記憶に新しい。

このように、わが国OR活動の要たるべき当学会の基礎を確立するのに大きな貢献をされた同氏の功績を称えて、本学会普及賞を贈呈する。

経歴 明治40年2月17日生

昭和4年3月 東京帝国大学工学部電気工学科卒
4年4月 日本電気株式会社入社
24年7月 同社取締役
31年7月 同社常務取締役
36年4月 同社専務取締役
37年11月 同社副社長
39年11月 同社社長
51年6月 同社取締役会長

OR学会関係 昭和40年～46年 評議員 40年～41年 常務理事 44年～46年 会長 53年～54年 会長
47年4月 名誉会員

第9回OR学会文献賞

●今野 浩氏「Maximizing a Convex Quadratic Function over a Hypercube」JORSJ, Vol 23, No. 2, pp.171～189

選考理由

今野浩氏は数理計画法の理論および応用に関して国内外で幅広い活躍をしているが、特に数理計画法の理論の中で困難であるとされている双線形計画問題凸関数の最大化問題の解法について実用的な観点を重視した一連の研究をJORSJ, Mathematical Programming等の雑誌に発表している。今回受賞の対象となった論文は、同氏のこれら一連の研究成果をふまえて、多次元超立方体上で凸2次関数を最大化する問題をとりあげ、問題をいったん双線形計画問題に変換した上、問題に即した深いカットを工夫するなどして、従来よりかなり大型の問題まで効率的に解くことができるような新しい解法を提案したものである。数理計画法における高度の技術を駆使して有用な結果を導いた本論文は、体裁・内容ともに、文献賞にふさわしいものと考えられる。

経歴 昭和15年8月11日生

38年3月 東京大学工学部応用物理学科卒業

40年3月 同科修士課程

40年4月 (財)電力中央研究所入所

43年～46年 スタンフォード大学OR学科留
学 工学博士

49年4月 筑波大学電子情報工学系助教授

著書「非線型計画法」52年 日科技連出版社

「整数計画法」56年 産業図書

OR学会関係 昭和53年～ 編集委員

〔今野さんのこと〕

昭和55年度の日本OR学会文献賞は筑波大学今野浩先生に決定された由、まさに戴くべき人が受賞されたという感じです。私が今野さんに“間接的に”(つまりそのとき今野さんは米国スタンフォード大学OR学科でG. B. Dantzig 教授の下で研究中)初めてお会いしたのは、私が電力中央研究所に入所した年ですから昭和46年ということになります。私が電研に顔を出して最初に言われたことは、「スタンフォードに行ってる今野君という君の優秀な先輩に外見がそっくりだな」ということでした。そのときは「はあ、光栄です」とか答えたつもりでしたが、果たしてその3年後に今野さんが帰国されて初めて“直接的に”お目にかかって気がつきましたことは、“これは自分よりは太目で体重もずっとありそうな人なの…”ということでした。

スタンフォード大での研究の後も今野さんは米国ウィスコンシン大の数学研究所、オーストリアのIIASAと国際的にも幅広い活躍をされ、海外における知己も数多くおられます。東大工学部計数工学科そして電研を通して小生にとっての先輩であられた今野さんは、後輩に影響をおよぼすこと大というのでしょうか、私にとっての電研における先輩としての地位を“放棄”され、昭和49年から現在の筑波大へ移れることになりました。Dantzig教授の下で高められた今野さんのポテンシャルはその後の筑波大においてさらに高められることになったと言えましょう。スタンフォード大における今野さんの論文は双線形計画問題がシンプレクス法によって解けることを示されたものですが、その後の研究にも大きく影響しています。切除平面法の適用による双線形計画問題の解法、凸2次関数最大化問題の解法等の数理計画法の分野において秀れた論文を書いておられることはもちろん、それ以外の多目標問題の解決理論の適用、エネルギー問題といった分野でも今野さんは広く活躍しておられます。今野さんが昭和43年に斎藤、野口両氏とともに政府募集論文の「21世紀の日本」の最優秀賞(東洋経済新報社より出版)を得ておられることなどは、今野さんの多才ぶりを示す余り知られていないことのひとつでは

ないでしょうか。今野さんがわが国の数理計画法を中心とするORの分野において、そして国際的にも今後ともますます積極的に活躍されることを願ってやみません。

(大山達雄)

第1回事例研究奨励賞

●西田俊夫グループ(西田俊夫, 青沼龍雄, 国村道雄, 長浜穆良, 真鍋龍太郎, 品川為紀, 角本武彦)
「財務諸表を用いた長期計画のためのシステム」
オペレーションズ・リサーチ誌 Vol.22, No.3

選考理由 関西情報センターでは従来から企業経営に経営科学手法を有効利用することについて種々研究を進めているが、その一環として2年間にわたって実施されたプロジェクトの成果が本論文である。

このシステムの主な特長として、①企業の長期計画立案のプロセスの中に経理財務処理を直接くみこんで、計画を実行した場合にそれが収益および各種財務指標にどう影響するかをリアルタイムに知ることができること、②計画手法として企業の慣行による試行錯誤法とORの手法特に線形計画法とを自由に選択できること、③広く一般企業に適用できるよう汎用性をもたせていること、の3点があげられる。特に①は実用上企業経営者に対する説得力が大きいといういちじるしい特長をもつ。

また、このシステムは2つの会社によって、実用上十分に有効であることが確認されているし、別の1社では一部修正のうえ実用化が進められている。

昨今のように企業環境の激変する乱気流時代には、このシステムは中・短期計画用にもますます有効な手段になりうると思われ、今後の発展強化とともに広く各企業への適用指導をもあわせて期待したい。

●瀧口幸弘・金子準二

「工場群における電力・蒸気の最適供給システム」

オペレーションズ・リサーチ誌 Vol.23, No.4

選考理由 この論文は、エネルギー節約のテーマに正面からとりくみ、効果的な解決をした事例の報告である。

エネルギー問題は現代の各企業にとって重要かつ共通の課題で、テーマとしての有用性は自明である。モデルの作り方は実務的に納得できるもので、しかも現実性のある近似を行ないつつ適切な技法を駆使している点は実践的ORとして大いに評価できる。このようなアプローチはおそらく多くの現場で採用できるものであり、会員を力づける。

特に、この解決手段は定常的に運用できる形にし、業務実施にシステムとして定着させ、継続的に効果を発揮

しているという事実は、ORの有効性を高く評価せしめるものといえる。身近かで大きな成果をあげうるテーマとアプローチは事例研究奨励賞に相応しいものと認められた。

●木下知己

「小売店立地計画の新しい考え方」

オペレーションズ・リサーチ誌 Vol.24, No.5

選考理由 この事例研究では小売店立地計画を、出店計画者・地元商店街・行政サイドそれぞれの立場から検討するための数理計画モデルを作り、三菱総研において独自に開発したソフトウェアを用いてそれを解き、具体的な数値を提示している。

従来この種の問題はミクロ的な視点から検討されていたが、この研究ではマクロ的に総消費者の買物時間コストを最小化するという立場をとり、そのために非常に明解な解析が可能になっている。

また、候補者の属しているシンクタンクが独自に開発したソフトウェアを用いてこの問題を解くことに成功し、しかも貴重な結果を公表したことは、この分野の学会活動に対して大きな貢献をなすものと思われる。

【文献賞および事例研究奨励賞について】

OR学会の文献賞は故大西定彦氏の基金によって始められた大西記念文献賞を引きつぐ形で、昭和47年度から発足したもので、原則としてその年に発表された若手研究者(40才以下)の優秀な論文1篇に対して贈られている。これには副賞として10万円がつけられている。

毎年、年末になると学会誌を通じて推薦の募集が行なわれ、今回は推薦のあった10篇から1篇が選ばれた。

事例研究奨励賞は、事例研究の発表を奨励する意味で新たに設けられた賞であり、今回がその第1回の選考であった。このため、今回は特に過去5年間にわたり、学会の研究発表会および機関誌・論文誌で発表された事例研究を対象に選考がすすめられ、上記3篇が選ばれた。

この賞は事例研究の1つ1つを対象とするので、個人であるかグループであるかは問わないが、本学会において発表されたものという制限をつけている。それ故、各位におかれても研究発表会もしくは機関誌等を通じて活発に事例研究を発表されることを期待している。

表彰委員会

〔表彰委員会・昭和55年度委員〕 森村英典(委員長)、原野秀永(副委員長)、伊理正夫(文献賞小委員長)、小田部齊、刀根薫、三浦大亮